

2 牧田家の記録

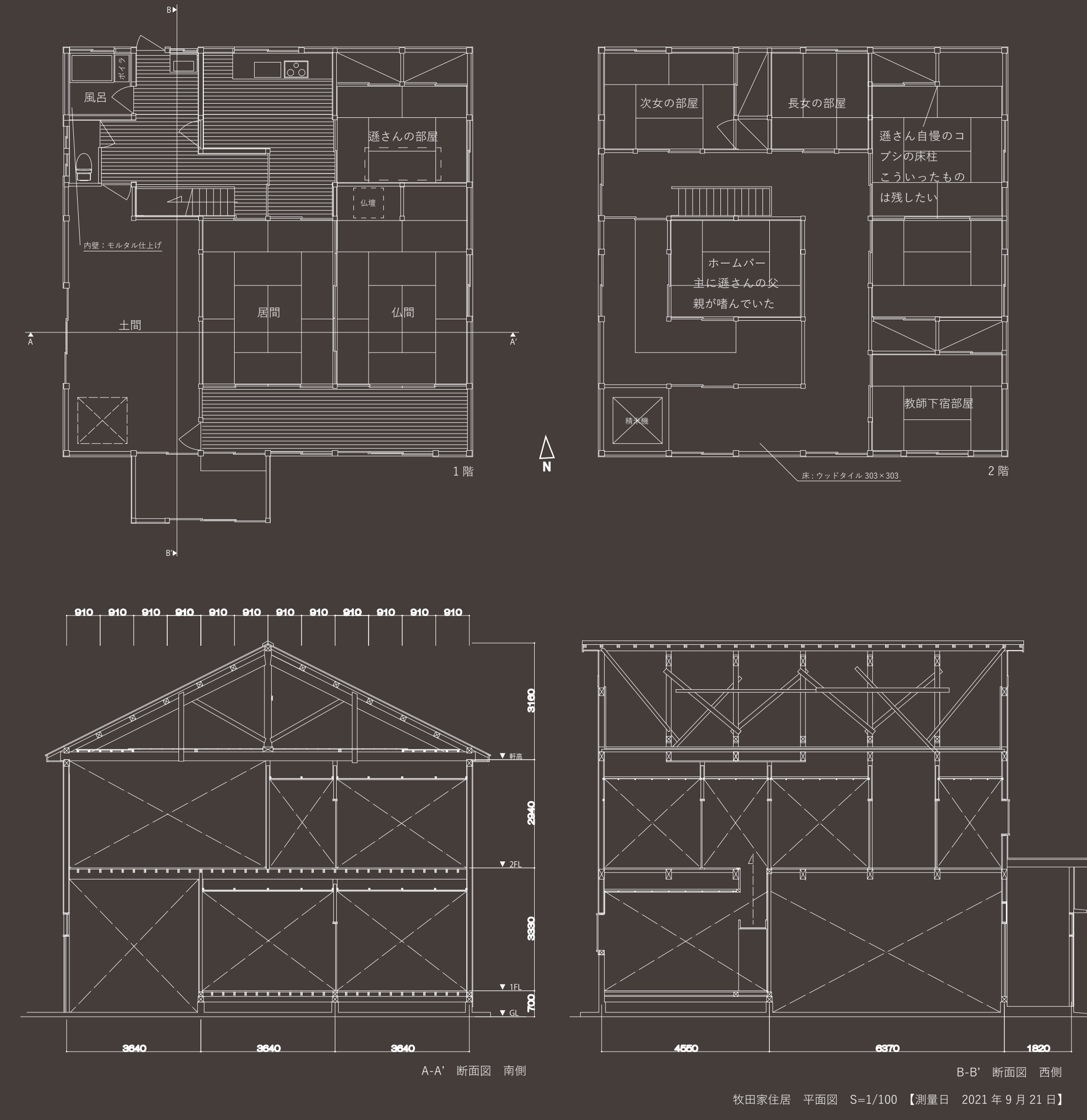


1 牧田家との出会い

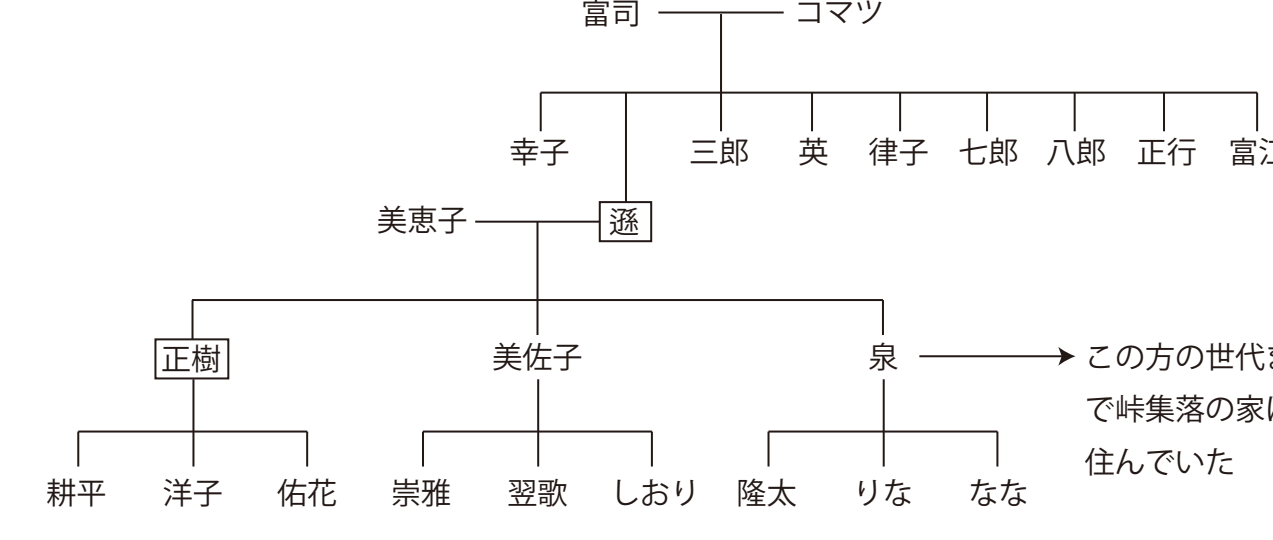
峠集落の牧田通さんと出会ったのは、峠集落でホテルとカフェをやっている桑井貴志さんからの紹介であった。峠集落でスタディできる家はないだろうかと相談したところ、ちょうど 10 月に空き家になる家があるよと教えてくださった。そこでその家の主人である牧田通さんに連絡を取り、ケーススタディとして測量をさせてもらうことと、歴史について教えていただくことになった。測量当日は気温が高く、誰も立ち入っていない屋根裏での測量は困難を極めた。

2 牧田家住居

1981 年、既に築 27 年経っていたその建物は旧新井市（砂高市）から十日町市峠集落に移築されてきた。元々、新井市の施設として使われていたその建物は失業対策のための事務所が置かれ、俗称ニコヨン（日雇労働者のこと、日給が 240 円であったことから）が集まる場所であった。移築前は内部に間仕切りがなく、2 階は卓球場としても使われていた。当時、軒下は 26 尺あり内部には六間の梁がかけられ、その梁で大空間を支えていたという。昭和 40 年ごろ、牧田通さんの知人が市から 200 万円貰いその建物を解体した。その解体された材を牧田さんはタダで譲り受け、峠集落に移築し瓦葺きの屋根をトタン屋根に変え、1 階部分を一間分低くし、住宅として新たに内部を間仕切った。そのため現在の牧田家の間取りはユニークであり、2 階には無窓居室の「ホームバー」なる部屋が存在している。面白いことに日当たりが良いはずの南側には主要な居室が位置していない。また外周の柱には五寸角の材が使われており、この太さの材を使った住宅は峠集落に 2 軒しかないという。牧田さんは移築されてきた時は村中の人が見物しに來たもんだと自慢げに語った。



牧田家系図



3 牧田通さん

御年86歳。峠集落の自宅で一人暮らしをしていた。しかし昨年10月、高齢のため息子、正樹さんのいる上越市へと引っ越した。通さんには9人の兄弟と9人の孫がいる。母親はコマツ、その長男として生まれた。大人になると夏は農家、冬は世田谷におでん屋、夜鳴きそば、やさいも屋として出稼ぎに出た。棚田も数多く持っており、最盛期には地域内で4番目の規模の農家だった。しかし現在では全ての耕作地を自然に戻し、ミョウガなどが生えているという。その傍らハンターも46年やっていたそうだ。子供も生まれたが皆集落を出て、現在では長男は上越市の市議会議員。長女は富山で事務仕事をしており、次女は千葉の習志野へ嫁に出た。奥さんは平成12年に亡くしており、残念ながら家を継ぐ人はおらず、長い間一人暮らしだった。それまで牧田通さんの暮らしていた住宅についても触れると、最初に暮らしていた家は峠集落南側の国道沿いに建てられていた木羽葺き屋根の家である。88 年前に牧田家は分家となり家は 50 円で売りに出された。次に暮らした家は現在の牧田家とほど近い、現在携帯会社のアンテナが立っている場所の前にあった茅葺き屋根の家である。これは赤痢の野戦病院として使われていたものを購入し住宅としたものであった。そこで 25 年間暮らし、現在の住宅に移り住んだ。その際に茅葺き屋根の家はロープをかけて二階部分から手作業で解体したという。

4 息子の正樹さんに集落と実家への思いを聞いた。

- 峠集落の昔の記憶について教えてください。
あなたが子供の頃、実家に住んでいたとき、近所の方とお付き合いはありましたか？また現在ではどのような関係にありますか？
→子供の頃、あった。現在、野菜をもらったりしている。
子供の頃、地域のイベントに参加していましたか？参加していればそれがどのようなイベントで誰と行ったのか教えてください。
→盆踊り、花火大会。親や祖父母と行った。
昔は棚田の管理に牛を利用していたと聞いております。子供の頃に牛はいましたか？棚田との思い出も教えてください。
→牛は家で飼っていたが、農作業には利用していなかった。車が行かないところなど背負ってイネを運び、苦労したところ。
峠集落が観光地化されたことに対して、現在では観光客が訪れることによって棚田を管理する使命感が繋がっていると集落の方にお伺いしましたが、当時観光地となることに抵抗はありましたか？
→予想もしていなかった。
■実家の建物について教えてください。
実家の建物に対する何か深い思い出はありますか？
→10歳の時に新築した。壁塗りなどを手伝ったりして思い出がある。
あなたが子供の頃と比べ、家の周辺の環境にどのような変化がありましたか？
→人家がへり、農地は耕作する人がなくなり荒地が増えた。
もし実家の建物が火事になったとき、何を真っ先に持ち出したいと考えますか？
→仏壇
実家に人が住まなくなり、買い取り手が見つかず荒地となっているとします。率直にどのような気持ちになりますか？
→悲しい、寂しい
家が空き家となったとして、その土地をどのように活用したいと考えますか？またその際の障害となりうるものを教えてください。
→農家レストラン。経営、働く人がいない。資金がない。
実家の建材が再利用されるようになったとき、形も大きさも全く別の用途に使用されても良いと考えますか？
→形は違っても建物であって欲しい。
仮に実家の建物がシェアオフィス等にリノベーションされたとしたら、そこを利用したいと思いませんか？
→一年一回くらい
その他、集落に対する思い出がありましたらお聞かせください。
→生まれ育ったところであり廃村にならないで欲しい。
■今後、人口減少により中山間地域の衰退がより激しくなるものと思われれます。地域存続に対する考えをお聞かせください。
中山間地域の棚田や建物等の荒廃に対し、行政ではどのように対策を行うべきと考えますか？
→手厚く対策をとる。
地方都市では中心市街地の活性化が目指されていますが、人口を増やそうとする市街地と人口の流出元となる地域との関係性はどのようにあるべきと考えますか？
→都市に出たい人は出ればいいが、中山間地に住みたい人が住めるようにする。
中山間地域の家を管理したいと思っても、生活の基盤を市街地に移しているためなかなか手を入れることが難しいという方がおられます。そのような方々に対してどのような提案をすることが相応しいと思いませんか？
→移住者の募集
今後、中山間地域の集落において移住者が来ず存続が厳しくなる地域が出てくるとします。そのような地域に対してはどのような環境整備が必要になると考えますか？
→すべての地域の存続は難しい。残せるところを選んで残して行く。

構造

構造としては六間 × 六間の正方形の平面であり、基本的に外周の柱は五寸、内部の柱は四寸の柱で構成されている。また、戦後に建てられたということもあり構造材としてベイツが用いられている場所もある。小屋組みはトラスとなっており比較的新しい工法によって建てられたものと推測できる。主要な建材は再利用されているが、間仕切りを作るために近くの山から杉を50本切ってきて加工し取り付けたそう。

外側の柱は五寸、内側の赤く染まっている柱は四寸。
【外柱】五寸（150×150） 24本 うち4本が通し柱
【2階梁】240×135 5本
【1階梁】280×135 5本
【合掌】250×140 5本
【頼杖】135×135 5本

変更可能な部材
【内柱】四寸（120×120） 51本
ほか間柱、根太、大引、小屋筋交い等